

生命科学者 柳澤桂子氏に聞く「女性の生き方」

お茶の水女子大学名誉博士（昭和35年理学部卒）

インタビュー：篠塚英子 本誌編集長



— 柳澤さんがお茶大生だったときの、取っておきの話をきかせてください。

私が卒論のテーマを選ぶとき、私にはどうしてもやってみたいテーマがありました。ある薬剤に対する耐性のある突然変異体を分離することでした。助手さんにそのことをお話しすると、それは、お茶大ではとても無理だといわれました。私はあきらめずに何度もお願いに行きました。最後には、そんなテーマを選んだら卒業できないかもしれないと言われました。私は「それでも結構です」と言って許可を頂きました。それから自分で勉強して、わずかなお小遣いで実験器具や本を買って、一人で始めました。そして、幸いなことにうまくいったのです。後になって、もっと生物学を知ってからわかったのですが、助手さんの言われたことは本当で、卒業が危ぶまれるほど難しいテーマだったのです。

— 生命科学者という職業はいつごろから意識しましたか？

8歳の時「棘のないサボテン」というアメリカのルーサー・バーバンクという育種家の伝記を読み、植物学者になりたいと思いました。

— 結婚と研究者の両立、とくに育児期はどのように対処してきましたか？

結婚と同時にニューヨークのコロンビア大学の大学院に入りました。Ph.D.を取るまでの3年間は、何とか家事と研究を両立させることができました。5月に学位を取り、8月に長男を出産。11月から慶應大学医学部の助手として働き始めましたが、子どもが1歳になって、私の後を追って泣くようになってから、子どもの精神に傷を残してはいけないと思って、退職しました。とても辛い決断でした。当時は子連れで研究者になる人はほとんどいなかったのだから、私が悪い前例になるのではないかと悩みました。

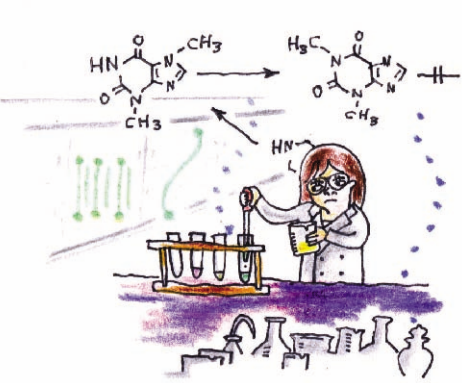
やがて、長女も生まれて、私は下の子が幼稚園の年長組になるまで、専業主婦に徹しました。もともと家事は好きだったので、子どもの洋服からおやつまで、全部手作り、家はピカピカに磨きました。

そして7年経ったとき、私はまったく無気力になってしまったのです。誰も認めてくれないことに、全勢力を注ぎ込むことには限界がありました。私は専業主婦第だということ、はっきり認識しました。

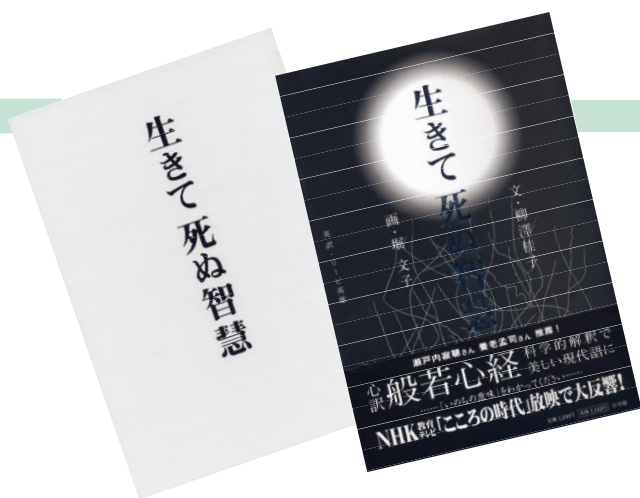
そんなときに、わりに近いところに、新しい生命科学の研究所ができるので来ないかといわれ、下の子どもも5歳になっていたのだから、思い切ってフルタイムの研究者に復帰しました。

— 病の後、研究所を退職せざるを得なくなり、しかしその後、科学ライターに新しい道をつけたきっかけは何でしょう？

退職して、研究所で使っていた荷物が家に届いたとき、私は研究所のものが鉛筆1本でも混ざっていたら返そうと思って、調べていました。そのときふと、私の身についてしまったものは、どうして返せばいいのだろう、と思いました。12年間研究所に勤めましたから、研究所のお金で、私は一人前の研究者に育てられたのです。さらに考えてみると、小学校から大学まで、国民の税金で勉強させて頂きました。アメリカでも奨学金を頂いていました。これを何とかして、社会にお返ししたいというのが、私が本を書くきっかけとなりました。本を書くこと以外は、できなかったのです。



イラスト/緒方 泉



『生きて死ぬ智慧』（文・柳澤桂子、画・堀 文子／小学館／2004年／1,200円）

— 近代医学では認めてもらえぬ病をかかえて36年。一昨年のベストセラー『生きて死ぬ智慧』を書くきっかけと、そしてこの本のメッセージは何でしょう？

「般若心経」を現代詩に訳すというアイディアは、私のものではなく小学館の沢田芳明氏のもです。まったく知らない編集者から突然手紙を頂いて、私は「おもしろそうだ、やってみよう」と思いました。

それまで10年間あまり、中村元氏の著作を読んでいましたので、パソコンに向かうと、2日間で訳詩はできてしまいました。それくらい、「般若心経」が私のものになっていたのだと思います。

このお経のメッセージは「自我をなくしなさい」ということにつきます。自我をなくして一元的な世界に生きるのです。他の宗教も、皆おなじことを言っていると思います。

— 少子化や自然破壊など将来は難問が立ちはだかっています。これから社会に羽ばたく若い女子学生に、生命科学者として伝えたいことで、しめくくってください。

これまでは、女性の地位を引き上げるために、「男と女は変わらない」ということが盛んに言われてきました。これからは「男と女は違う」ということを考えていかなければならないと思います。

女性は子供を産み育てる性です。けれども人間でもありますから、自己実現の欲求は男性と同じように持っています。この2つを両立させることは大変むずかしいことです。男性中心にできあがった社会の機構を変える必要があります。

女性には女性特有の発想があります。社会を男性だけに任せられない所以です。女性の発想でしかできない教育もあります。

このようなことを考えますと、女性が集まって、女性としての考えを社会に問いかけていくことは非常に重要なことだと思われま。そのようなところに女子大の存在価値があると思います。

特に私が今、お茶大が中心になってやっていただきたいプロジェクトは、母親の出産後、いつ子どもから離れるのが、子どもにとって一番良いかという、乳児心理学の研究です。

皆さんが良きリーダーになられ、女性が安心して、子育てと自己実現をかなえられる社会を作ることにご貢献して下さることを、願っております。



自宅ベッドで執筆中の柳澤桂子氏

